

## 小倉から大坂までの八王子千人同心の動向

國學院大學大学院文学研究科史学専攻  
博士課程前期 2 年 辻 博仁

### はじめに

第二次長州征討において、当初、広島に滞在していた八王子千人同心隊は、小倉出兵の内命により、慶応 2 年 6 月 15 日に小倉へ赴いた。以降、千人隊は、総督である小笠原長行の警護や敵陣の偵察、1 日 3 度の勤番等といった任務に当たった。しかし、諸藩兵の相次ぐ戦線離脱と小笠原の遁走に伴い、残された幕府軍は小倉からの撤退を決定。これにより千人隊は、鶴崎経由で松山へ向かい、約 2 箇月間に渡って逗留した後、大坂へ引き揚げることになる。

### 主な先行研究

- ・高橋磯一氏「八王子千人同心について」<sup>i</sup>

第二次長州征討の際、八王子千人同心隊が小笠原長行に供奉して小倉口の戦いに参戦し、「敗戦した」ことが述べられている。

- ・村上直氏「甲州および第二次長州征討出兵」<sup>ii</sup>

小倉口の戦いの際、八王子千人同心隊は総じて督戦的な役割を果たしていたことを明らかにした。また、千人隊の士気は極めて低く、戦闘への参加も消極的であったことが、諸藩兵の戦線離脱の契機となったと主張した。

- ・吉岡孝氏『八王子千人同心』<sup>iii</sup>

砲術方・御旗指方のみならず、長柄方が少なくとも松山までは進出していたことを明らかにした。また、千人同心は村に統御される側面も強いが、農村が働き手を長期間手放すことは難しい為、隊には、60 代超の高齢兵士も多く含まれることとなり、近代的な軍隊としては未熟なものであったことを指摘した。

### 問題点

- ・幕府軍全体の士気が低く、戦闘能力も劣っていたという認識が前提とされており、「惨敗した幕府軍」「圧勝した長州軍」という構図が固定化されている。
- ・特に、幕府軍の兵士らが西洋式兵術の訓練を受け、西洋式装備で武装していたという事実や(宮澤氏報告参照)、倉敷浅尾騒動等、非常事態の発生時に合理的な対応を見せたという事例の存在(井上氏報告参照)等は殆ど考慮されていない。

### 本発表の目的

第二次長州征討における八王子千人同心隊について、小倉口の戦いから九州・四国を経て大坂に戻る迄の動向を追う。その上で、「敗走」という言葉からは程遠い実態を解明する。

## 1、小倉口の戦いにおける八王子千人同心の動向

・慶応2年4月、広島出陣を命じられた八王子千人同心隊は大坂を出発、翌5月に広島へ到着。当初は市街警備等の任務にあたっていたが、千人組砲術方に対し、小倉への出張命令が下る。6月1日、千人頭原嘉藤次・同窪田喜八郎以下八個小隊が広島を出発、伊予を経て、小倉に到着。

・小倉では、一部の部隊が敵陣の偵察や長浜出張等、戦線に送り込まれた。また、小倉口総督である小笠原長行の警衛や1日3回の市街警備等、戦闘支援任務にあたる。

・7月27日に勃発した赤坂の戦いでは、第一・二・六小隊が熊本藩兵の元へ、第七・八小隊は小倉新田藩兵の元へ、それぞれ応援に赴いた他、残りの小隊は小笠原出馬の護衛に当たった【史料1】。

→八王子千人同心隊は、主に戦闘支援任務の面から重要な役割を果たしていた他、実戦も経験。

・熊本藩兵の責任者であった長岡監物、国元へ以下の書状【史料2】を残し、独断で帰国を決断。それに続き、諸藩兵が次々に撤兵を開始。

→長岡が、以前より小笠原と対立していた事実も指摘されているが、少なくとも撤兵の要因が千人隊であるとは考えにくい。

⇒八王子千人同心隊が必ずしも戦闘に消極的であったとはいえない。

## 2、小倉から松山迄の八王子千人同心の動向

・最高司令官の不在という異常な事態の下、残された幕府軍幹部らは、小倉からの全面撤退を決定。

・あまりにも急な決定であった上、小倉城下は大混乱の状態であり、人足等の手配も出来ないことから、自力歩行が不可能な傷病人や持ちきれない荷物は小倉に残したまま出発することになる【史料3】。

・8月3日、日田で傷病人を除く全隊士が合流。山道が険しい為、豊後国西国筋郡代窪田鎮勝に荷物を預け、身軽になった上、出発【史料4】。

・8月4日の松木村を経て、翌5日には別府に至る。八番隊隊士の丸山惣兵衛は、別府について、名所だけあり繁盛している様子であったと記録している。

→別府周辺には、小倉の混乱の影響はみられない

・8月9日、8艘の船に分乗、鶴崎を出港。翌10日には伊予国三机港に寄港。荒天の為、暫くの間、出港見合わせや引き返しが続く。その間、一部の隊士が地元の祭礼を見物する余裕も見せている。

・8月17日の長浜寄港を経て、翌18日に三津に無事到着。荒天の為はぐれた二番小隊は、同15日松山に到着している。

・千人同心隊の到着前、松山では幕府軍敗退の報がもたらされたことから、長州藩兵の進

攻に備える必要が生じ、「以之外大騒キニ相成候」という有様であった。また、小倉の千人同心隊が散り散りに逃げ去り、行方不明となったとのデマが広まり、千人同心長柄方石坂彌次右衛門以下が驚愕する一幕もあったという【史料 5】。

### 3、松山逗留中の八王子千人同心の動向

- ・到着後、今後の行動方針について伺いを出している【史料 6】。

→独断で行動せず、指揮系統を絶対視する姿勢の表れか。

- ・結局、別命ある迄の間、松山で逗留する様指示される。妙向山法華寺・平安山龍泰寺等を宿舎とし、市街地の警備や軍事訓練に当たる。

- ・8月27日、秘匿されていた14代将軍徳川家茂逝去の知らせが松山に届く。鳴物停止が命じられ、訓練も見合わせとなる【史料 7】。

- ・9月3日には、小倉へ出張の目付に数人が供奉し、戦地に残した傷病兵の探索を試みている【史料 8】。しかし、現地は既に長州藩の手に入り、小倉入りは叶わず【史料 9】。

- ・9月6日の演習では、隊士らの練度の高さを若年寄より称賛されている【史料 10】。

### 4、松山から大坂迄の八王子千人同心の動向

- ・10月4日、大坂へ総引揚げ令が下る。

→千人同心松崎兵四郎は、このまま引き揚げるようなことがあつては幕府の權威が失墜しかねないと嘆いていたが、結局再戦は叶わなかった【史料 5】。

- ・10月7日、千人同心隊より行方不明者探索の嘆願書を提出。大坂到着後の同19日京極より「書面之趣一應承候得共京都江相越候ハ、猶可申立候事」との通達を受ける【史料 11】

→大坂引揚げ決定後も、戦意は衰えていないことが伺える。

- ・10月9日、8艘の船に分乗し、松山法龍寺を出発。

- ・10月11日多度津に到着。この日は丁度金毘羅大権現の大祭にあたることもあり、千人同心の丸山惣兵衛・原嘉藤次・窪田喜八郎・神宮寺金一郎・坂本源吾輔の5名が参拝に訪れている。又、四国八十八ヶ所霊場の1つでもある善通寺や、三帝御廟(第59代宇多天皇・第88代後嵯峨天皇・第90代龜山天皇の宝塔)等の名所にも併せて回っている。

- ・10月12日の兵庫寄港を経て、翌々14日、大坂に到着。

### おわりに

- ・小倉口の戦いにおいて、千人隊は、主に戦闘支援を担っており、幕府軍の一角で重要な役割を果たしていた。

- ・千人隊は、小倉よりの撤退の際には、散り散りの状態にはならず、総じて指揮系統に則

った集団行動をとっていた。出奔・刃傷等の規律の混乱はみられない。また、行軍の途中には物見遊山を楽しむ余裕も見せており、「敗走」という悲壮感漂う印象は薄い。

- ・千人隊が松山に逗留した際にも、市街地の警備や軍事調練、手当の支給等も行われており、規律に則った集団行動を継続している。

- ・千人隊の士気の低下を示唆する兆候は確認出来ない。むしろ、撤退後、小倉に残した同士の救出の為、再び危険な前線に赴くことを望む等、終始にわたり戦意が衰えていないことが伺える。

#### 今後の課題

- ・今回用いた史料に加え、他の隊士の日記等の史料を分析し、個別事例の実証を更に深める必要がある。

- ・近世近代以降期において、八王子千人同心の動向が社会にどのような影響をもたらしたのか、幕末維新史全体、国史全体の概念の中で位置づけていく必要がある。

---

i 高橋碩一「八王子千人同心について」（『史學』第15巻第2号、三田史學會、昭和11年）

ii 村上直「甲州および第二次長州出兵」（『江戸幕府八王子千人同心』増補改訂版、雄山閣出版、平成5年）

iii 吉岡孝『八王子千人同心』同成社、平成12年